

東洋學藝雜誌第十八號

明治十六年三月廿五日發兌

○病院錄事ノ互換ヲ圖ル演文 三宅秀

明治十六年二月十九日在京各府縣病院長諸君ヲ茅屋ニ招待シ幸ニ諸君ノ皆平素ノ情誼ヲ棄テスノ來會ヲ辱クスルヲ得タリ余カ喜何事カ之ニ過キン深ク諸君ノ厚情ヲ謝ス抑、此會筵ヲ開クノ果ヲ得タルハ何ノ因ヨリスルカ即チ內務省ニ於テ開設セラレタル衛生事務諮問會是ナリ然ラハ則諸君ト同シク此筵ニ相見テ學事ヲ談シ歡娛ヲ盡スヲ得ルハ實ニ是レ該諮問會ノ賜ト謂フヘシ顧フニ諸君今日ノ資格ハ全ク該諮問會ノ會員ニ即チ衛生事務擔任ノ人也ト雖元來我カ醫學ニ從事スル者ナレハ隨時或ハ醫學教育ニ或ハ衛生事務ニ或ハ疾病救療ニ其身ヲ任スルヲ有ルモ悉ク皆醫學者ノ範圍内チ出テスノ均シク是レ一般醫學ノ進歩ヲ圖ルチ得ルニ非サル者ナシ何者甲ノ進歩ハ乙ノ事業ヲ助ケ丙ノ進歩ハ乙ノ目的ヲ達セシムルカ如ク各互相須チテ離ル可カラサル者ナレハナリ又今日甲ニ從事スル者明日乙若クハ丙ノ事業ニ轉スルヲ有ルモ尙醫學者ノ素資ヲ失フニ非ス此ヲ以テ余ハ今夕諸君ニ向ヒテ醫學ノ

進歩ヲ促スヘキ方法ヲ談シ以テ諸君ノ高案ヲ叩ク請フ諸君ヨ一言ヲ吝ムコト勿カレ余曾テ親シク醫學ヲ目的トスル某會ノ開場式或ハ某會ノ會場ニ臨ミテ諸大家ノ演說ヲ聞キ又其演說等ヲ筆記シタル者ヲ觀ルニ語中必ク醫學ノ隆盛若クハ醫學ノ進歩ヲ説カサルコト無シ然レモ其說ク所多クハ空論ニ歸シ或ハ高尙ニ過キテ唯聽クニ宜シキモ之ヲ實行シ難キ者アリ或ハ卑近ニ失シテ實行シ易キモ其裨益アラサル者アリ是レ蓋シ論者意志ノ大小ニ關スルノミニ非スノ聽衆中ニ不學者及ヒ營業ニ關セサル者多キカ故ニ說ク者或ハ高尙ヲ飾リ或ハ其了解シ難カラシク慮リテ終ニ此ノ如キ過不及ノ弊ヲ生スルナリ中醫學者其志ヲ以テ醫學ノ進歩ヲ期スル諸君ハ曾テ今夕ノ如ク各地方ヨリ來ル衆多ノ實驗家一筵ノ上ニ相集リテ互ニ心情ヲ吐露スルノ好機會ヲ得タルコト有リヤ或ハ無カラシク余ハ未ダ曾テ有ラサルナリ近頃京、坂神ノ大醫學會アリ又今夕某醫會ノ諸君ヲ招集スル有リ然レドモ皆醫俗混淆ノ會ナリト聞ク尙識者アリテ名論ヲ其席ニ呈出スルコト有ルモ之ヲ聽取スルニ足ルヘキ聽耳ヲ



具フル者ハ此筵ニ在ル諸君ヲ含キテ何ソ復<sub>レ</sub>他ニ求ムルヲ得ンヤ因リテ余ハ茲ニ粹中ノ粹タル諸君ト共ニ着實ノ一方法ヲ約定シ以テ醫學ノ進歩ヲ將來ニ圖ラント庶幾スルナリ

今試ニ全國ノ醫家ヲ上中下ノ三等ニ別ツキハ上醫ハ輓近ノ醫學ニ通シテ且<sub>ツ</sub>其實驗ニ富ミ加フルニ本邦固有ノ疾病及<sub>レ</sub>事物ノ變遷等ニ明ナル者はナリ然レ<sub>レ</sub>此上醫ト稱スヘキ者ハ甚希ナル所ニモ假令<sub>レ</sub>其位官ハ上位ヲ占ムルモ醫學上ヨリ之ヲ視ル<sub>レ</sub>ハ皆中醫ニ算入スヘキ者多シ中醫ハ即<sub>チ</sub>此筵ニ在ル所ノ諸君及余輩ニモ今常ニ拮据勉勵シ以テ學事上ノ上醫タラントヲ熱望スル者はナリ此輩ハ決シテ爵祿位階ノ高貴ナル地位ヲ占メ<sub>ン</sub>ヲ願フ者ニ非ス而<sub>シテ</sub>下醫ハ余輩ノ誘掖ヲ受クル所ノ者はナリ今ヤ本邦下醫ヲ養成スル<sub>コト</sub>多ク又下醫ヲ<sub>シテ</sub>中醫ニ進マシムルノ具略<sub>ク</sub>備ル<sub>ニ</sub>近シト雖中醫ヲ上醫ト爲スノ具ニ至リテハ殆ト缺<sub>ク</sub>テリ豈ニ慨嘆セサル可ケンヤ

今一二ノ例ヲ擧ケテ之ヲ言ハ<sub>ン</sub>ニ醫籍ハ古來支那印度ヨリ傳<sub>ル</sub>者ノ中ニ必<sub>ズ</sub>今日ノ醫學ヲ進歩セシムルニ足ル

ヘキ者ナキニ非サルヘシト雖數千萬卷ヲ繙閱涉獵スルニ非サレハ直ニ之ヲ應用ス可カラス又輓近歐米ヨリ齎<sub>ス</sub>所ノ者ハ其論說至テ高尙ニ<sub>シテ</sub>明確ナルモ東洋地方ノ狀況ヲ說クニ至リテハ亦杜撰迂濶ノ事ナキヲ保シ難シ況ヤ其譯述ニ係ル者ノ如キハ唯下醫ヲ養成スルノ具ニ適スルモ固ヨリ中醫ヲ導キテ上醫ト爲スノ具ニ非サルナリ

此ノ如ク中醫ヲ誘掖スルノ具乏シキヲ以テ遠ク教師ヲ海外ニ聘シテ之ニ代<sub>フ</sub>然レ<sub>レ</sub>其師タル者ト雖海外ニ在リテハ實ニ上醫タルモ其初メテ本邦ニ來ルヤ亦中醫ニ等シク一時其伎倆ヲ伸フル<sub>コト</sub>能ハス何者平素ノ實驗ハ曾テ歐洲ニ於テ得タル所ナリ又歐洲ノ如ク上醫ト爲ルノ具備レル地ニ在リテハ方俗、習慣、飲食、健態、疾病等ノ事ニ就キ總ヘテ古今ノ實驗ヲ詳知スルヲ得ヘキモ本邦ニ於テハ其具一モ未<sub>ダ</sub>備ラ<sub>ズ</sub>又本邦ニ於テ僅ニ數年間ノ實驗ヲ爲スモ亦必<sub>ズ</sub>本邦人ノ如ク土地ノ事情ニ通スル<sub>コト</sub>ヲ得サレハ到底本邦ノ中醫ト俱ニ中醫ノ域ヲ脫スル<sub>コト</sub>難カルヘシ

人或ハ言ハ<sub>ン</sub>今日幾多ノ醫學新誌アリテ歐米ノ實驗ニ係ル新說ヲ登錄シ又本邦ノ發見ニ係ル奇病說ヲ記載シテ世



上ニ公行スレハ之ヲ以テ學事ノ進歩ヲ促スニ足ルヘシト  
 余ハ則此言ヲ非トス何者新誌ヲ編ム者ハ可及的其冊子ノ  
 世上ニ流布センコト欲スルカ爲專ラ新奇ノ事ノミヲ摘採  
 シ其記スル所新療法ニ非サレハ則奇病說ニノ一ニ以テ購  
 讀者ノ歡心ヲ迎フルナリ其新誌若シ此二者ヲ削去スルキ  
 ハ必ス世上ニ流布スルコト無キニ至ルヘシ而シテ此ノ如ク新奇  
 ノ事ノミヲ載セタル新誌ハ世ノ嗜好ニ應スルモ絶エテ實  
 地ニ効ナク或ハ偶々下醫ニ益スル所アルモ中醫以上ニ向  
 ヒテハ一モ益アルコト無シ又宿老ノ傳フル所ノ事ト雖若シ  
 其理ヲ推定セス漫コ之ヲ信シテ新誌上ニ登錄スルキハ反  
 テ世人ノ惑ヲ惹起スルニ至ル故ニ老醫ノ說ヲ聞キテ醫學  
 ノ進歩ヲ助ケントスル者ニハ必ス其說ノ是非ヲ判スルノ  
 學識ヲカルヘカラス  
 又今日既ニ諸方ニ開設セル醫會モ其組織、中、下醫ノ混合  
 物ヨリ成レルヲ以テ下醫ハ中醫ノ誘掖ヲ蒙ルモ中醫ハ絶  
 エテ益ヲ受クル所ナク乃チ中醫ハ此會ニ向ヒテ益友ヲ求  
 ムルノ道ヲキナリ夫レ此會タル或ハ私設ノ醫學校ニ似タ  
 ル者アリト雖其性質ハ畢竟同シカラスノ反テ學派上ノ競

爭ヲ煽起シ或ハ全國ノ醫權ヲ掌握セントノ望ヲ懷キ或ハ  
 雜誌ヲ發行シテ財利ヲ獲ンコトヲ圖リ眞ニ高等醫學ノ進歩  
 ヲ促スノ目的ハ毫モ之ナキカ如シ  
 眼ヲ轉シテ我カ醫學上實地經驗ノ一事ヲ視テ考フルニ一  
 般醫學ノ研究ニ供スヘキ實驗場アルコト無シ唯々僅ニ各處  
 在來ノ病院アリテ療病ノ術ヲ研究シ得ヘキノミ今ヤ衛生  
 事務擴張ノ舉アルニ方リテハ私ニ信ス早晚衛生試驗場ヲ  
 設立セラル、ノ期アルヘシト此試驗場ハ實ニ衛生學ノ進  
 歩ヲ圖ルニ必要ナル一具ニシテ若シ此場ナクハ何日ヲ待チ  
 テ衛生學ノ進歩ヲ見ルヲ得ンヤ此ノ如ク實驗場ハ獨リ衛  
 生學ニ必要ナルノミニ非ス諸般ノ學術上ニ於テモ皆之ヲ  
 要セサルハ莫シ然ルニ不幸ニ我カ醫學ニハ生理、解剖、  
 藥劑、裁判醫學等ヲ實地研究スルノ場ナク又其實驗ニ使  
 用スベキ器具モ甚ダ乏少ニシテ唯僅ニ內外科、眼科、產科、婦  
 嬰科ノミ日々病院ニ於テ之ヲ實地ニ驗明スルヲ得而シテ此  
 精確ナル臨牀實驗ハ普通開業醫ノ苟モ爲シ得ヘキ者ニ非  
 スノ獨リ病院ニ於テノミ之ヲ實行スルヲ得ル所ナリ然レ  
 且又一地方ノ病院ニ於テハ實驗シタル者ヲ單ニ其病院ノ



實驗ト爲シテ廣ク之ノ各地ノ病院ト交互通報シテ以テ參  
 較照考スルヲ無クハ其實益ヲ得ルヲ恐ラクハ尙尠カラシ  
 此ノ如ク説キ去ル所ノ意想ヲ以テ熟考スレハ玆ニ願クハ  
 諸君ト相約シ將來各地病院ニ於テ總ヘテ見聞スル所ノ事  
 ハ細大ヲ論セス例之疾病表、患者表、解剖記事、外科手術  
 記事及ヒ考按等ヲ錄事ト爲シテ之ヲ中央局ニ送致シ中央  
 局ハ之ヲ統集シテ報告ヲ作り以テ各地ノ同盟者ニ頒ツノ  
 法ヲ設ケンヲ但此報告ハ敢ヘテ世間ニ流布スルヲ望ム  
 ニ非ス又敢ヘテ會醫ノ嗜好ヲ博セント欲スルニ非サレハ  
 其體裁等モ同盟諸君ノ衆評ヲ以テ之ヲ決シ且ツ時ニ改良  
 ヲ加ヘ勉メテ以テ坐シテ内國一般醫事ノ實況ヲ知ルヲ得  
 ルニ適セシメンヲ要スルナリ若シ諸君ノ賛成ヲ得テ此  
 法ヲ實施スルヲ得ハ則始メテ中醫ヲ益スルノ具一箇即チ  
 一師ヲ獲タリト謂フヘシ即チ余輩ハ之ニ頼リ以テ上醫ニ  
 達スルヲ勉ムヘシ抑從前世上ニ行ル、所ノ雜誌等ハ高尙  
 ヲ主トシ或ハ瑣事ニ流レ又新奇ヲ貴フカ故ニ今此報告ハ  
 肺炎、心病、胃腸疾患、梅毒、脚氣等ノ如キ普通ノ疾病ヲ揭  
 載セント欲ス而シテ其疾病表ニ據リ豫某地ニハ某風土病ア

ルヲ識ルヲ得レハ諸君カ他日甲地ヨリ乙地ニ轉スルヲ有  
 ルモ己ニ其地ノ情況ニ通熟セルヲ以テ到處己ノ伎倆ヲ伸  
 フルヲ能ハサルノ憂ナク且ツ下醫ノ地ニ墮ルノ悔ナカル  
 ヘシ加之傳染病蔓延ノ景況ヲ知ルモ現今衛生家ノ要スル  
 所ナレハ亦此報告ヲ以テ自ラ其望ニ充ツルヲ有ルヘシト  
 ス是レゾシカ意衷ヲ陳ヘテ諸君ニ議ル所ナリ諸君幸  
 ニ同意ヲ表セラル、ヤ否

○論理學一斑（第十六號ノ續キ） 千頭清臣

吾輩ハ前段ニ臚列セシカ如ク今日我カ邦ノ言語文章ニ於  
 テ往々誤謬ノ歸結アルハ要スルニ論理學ニ一定ノ法則ア  
 ルヲ知ラス輕シク一箇ノ臆斷ニ任カスノ弊害ニ出ル者比  
 々是ナリ故ニ論理學ニ關シ眞成ノ法則ハ如何ナルモノカ  
 ヲ示スハ今日ニ於テ最モ必用ナリト信スルナリ  
 今日論理學ハ我カ邦ニ於テ之ヲ講究スル者未タ多カラズ  
 論理學ト云ヘハ奇僻怪澁ニシテ容易ニ解スヘカラサルカ  
 如ク思惟スル者ナキニ非ル可シ蓋シ孰レノ學科ト雖モ外  
 面ヨリ之ヲ窺フトキハ實ニ非常ノ困難ナルカ如クニ見ヘ  
 往々其門ニ入ルノ望ヲ絶ニ至ル然レモ一タヒ精神ヲ費ヤ



普通ノ法則ヲ解得スルキハ其困難ハ自カラ水解シ深ク其堂奥ニ達セントノ希望ヲ發スル者ナリ論理學ノ如キモ亦然リ世人ノ之ヲ認メテ奇僻怪澁ト爲ス者ハ其普通ノ法則ヲ知ラサルニ坐セリ已ニ其門ニ入ルキハ條理秩序ノ整然トシテ之ヲ解スルノ容易ナルヲ知ルナラン

殊ニ論理ノ用法ハ既ニ今日普通ノ談話中ニモ存在スル者ニシテ談話アレハ茲ニ多少ノ論理アリ前哲ハ其間ニ就イテ一定自然ノ規則ヲ見出シテ一ノ學科ト爲セシニ過キヌ例ヘハ雨雪ノ降ルヤ人々相逢フ毎トニ曰ク「悪い者がふりまじ」此の跡かどの様又悪くふりまじふりト是レ他ナシ雨雪ハ道路ノ泥濘ヲ生スル者ナリ今ヤ雨雪アリ然レハ道路ノ泥濘ナルヘキト歸結ヲ爲スハ即チ自然ニ論理法ニ合スル者ナリ又一ノ教育ナキ婦女モ小兒ノ庖刀ヲ揮リ回スヲ見レハ劍呑ナリト云フ是レ刃物ハ人ヲ傷ケル者ニシテ劍呑ナリ庖刀ハ刃物ナリ故ニ今庖刀ヲ揮リ回スハ劍呑ナリト云フカ如ク規則ニ因テ推斷ヲ得タルニ非スト雖モ自然ノ經驗ニ因テ知ラス々々其論理ノ用法ニ合スルニ至リシノミ夫レ此ノ如ク吾人カ日々ニ爲ス所ノ談話ハ

既ニ零ホ自カラ論理學ノ用法ヲ具ヘリ止タ其談話タル概子一個ノ考想ニ因テ推斷ヲ爲シ道理ニ照ラシテ之カ當否ヲ判知セシ者ニ非サルニ因リ動モスレハ甚キ誤謬ヲ生スルニ至ルノミ故ニ其間ニ於テ一定自然ノ規則アルヲ解知セハ日々ノ談話ハ皆ヲ取テ以テ此學ノ材料ト爲スヲ得ヘシ之ヲ天文學者ノ萬里外ニ在ル物ヲ以テ其學ヲ研究シ動物學者カ顯微鏡ヲ以テ微渺ノ動物ヲ檢點スルニ比スレハ其難易日チ同フシテ語ルヘカラサル者アラソ

元來論理學ニ三大區別アリ曰ク名辭曰ク命題曰ク推測式ナリ名辭アリテ然ル後ニ命題ヲ生シ命題集リテ推測式ヲ成ス故ニ精細ニ論理學ノ法ヲ説ントスルキハ先ツ名辭ヨリ始メ從ツテ命題推測式ニ及フヘキ順序ナレモ名辭ノ解説タル頗フル繁雜ニ涉リ一々之ヲ説キ出スキハ讀者チシテ眠ヲ催フサシムルノ恐レ有リ且ツ吾輩ノ此ノ講義ヲ爲スヤ極メテ簡短ヲ主ト爲スニ因リ直チニ命題ヨリ説キ起シ論理學ノ法則ニ就キ其一斑ヲ舉示スヘシ命題ヲ講スルニ當リ其重要ナル條款ヲ舉クレハ左ノ如シ曰ク命題ノ元素曰ク命題ノ種類曰ク命題上名辭ノ廣衍曰



ク命題ノ對立曰ク命題ノ轉換及ヒ直接推度法ノ六款是レ  
ナリ何チカ命題ノ元素ト謂フ茲ニ左ノ如キ一ノ命題アラ  
ン

加藤清正ハ勇者ナリ

其上ニ在ル加藤清正ト云フ名辭ヲ主辭ト名ケ其下ニ在ル

勇者ト云フ名辭ヲ賓辭ト名ク而シテ「ナリ」ト云フ辭ハ此

二ツノ名辭ヲ連結シ清正ノ勇者タルコト示ス者ナリ故ニ

之ヲ連辭ト名ク主辭賓辭連辭ノ三者ヲ以テ命題ヲ成スニ

因リ之ヲ稱シテ命題ノ元素ト云フ

何チカ命題ノ種類ト謂フ命題ニ三種アリ其一ヲ定立命題

ト名ク即チ「信義ハ尊フヘキ者ナリ」トカ「靈魂ハ死スヘ

キモノニアラス」トカ直チニ取極メ或ハ打消シテ爲スモ

ノチ云ヒ而シテ其二ヲ設若命題ト名ク即チ「設若モ風カ

吹クナラハ櫻花カ散ルデアロー」ト云フカ如ク「設若」ナ

ラバ」ノ辭ヲ以テ或ル場合ノ下ニ生スル事情ヲ示ス者ナ

リ其三ハ即チ撰擇命題ニシテ「彼ノ舟ハ東ニ行クカ又ハ

西ニ往クカ」花見ニハ酒ガ善イカ牡丹餅ガ善イカ」ト云

フガ如ク彼レニ非サレハ是レト其二様ヲ選擇スルコト指

ス此ノ第二第三ノ命題ヲ解説スルコトハ之ヲ後日推測式ヲ  
詳論スルキニ譲リ是レヨリ直チニ定立命題ニ就キ簡短ニ  
分析ヲ爲スヘシ

定立命題ヲ分量ト性質トノ二ツニ大別シ而シテ其分量ヲ  
分ツテ大小ノ二者ト爲シ其性質ヲ陽陰ノ二者ニ分ツ故ニ

定立命題ハ都テ左ノ四項ト爲ル

第一 大陽命題 (凡テ日本人ハ愛國者ナリト)

第二 大陰命題 (凡テ日本人ハ愛國者ニ非ズト)

第三 小陽命題 (或ル日本人ハ愛國者ナリト)

第四 小陰命題 (或ル日本人ハ愛國者ニ非ズト)

(此稿未完)

○山毛櫸ノ説

松村任三稿

山毛櫸屬ハ殼斗科中榲桲族ニ隸スル常緑或ハ落葉喬木ニ  
シテ凡テ十五種アリ地球上寒暖兩帶地方共ニ廣ク散布ス  
(ブナ)(Fagus sylvatica)ハ即チ其一種ニシテ本邦諸州深山  
ニ多クコレアリ又一種「イヌブナ」(Fagus Sieboldi)アリ其  
形狀ハ皆大同小異ニシテ衆人ノ熟知スル所ダレバ茲ニ贅



セズ

我が「ブナ」ト同種ノモノ歐羅巴諸國ニ産ス彼地ニ於テハ甚有用ノ一樹タリ我國ニ於テモ亦無用ノ木ニアラザレバ近頃東京日々新聞紙上此木ハ薪ト爲スノミニシテ他ニ無益ノ雜木タルヲ論セシ山林家アルニモ拘ハラズ余ハ今其効用ヲ左ニ掲ケントス

諸我國ニ於テハ江州多賀ノ山民木匙シヤクシヲ造リ紀州ニテ黒江椀ヲ製スコスキ(日本產物志)越後ニテ雪中第一ノ用具ナル木鋤コスキヲ造ル(北越雪譜)加賀ニ於テモ木鋤ヲ造リ又六尺棒ヲ製ス(博覽會出品)山形縣ニテ盆椀杓子等ノ器具ヲ造ル(同縣)

置賜郡勸業課委員佐藤氏)北海道ノ土人此材ヲ彫鏤シ多シ諸器ヲ作り(日本產物志)又木剝舟ヲ造ル(東夷物產志)近來東京近傍ニテ下駄ノ齒ヲ作ルニ此材ヲ用ユルニ至ル(岡氏)又山形縣ニテ此實ヲ炒リテ味噌ニ混和シ食用ニ供ス又油ヲ搾リ(本草圖譜、日本產物志)或ハ食料或ハ點火ノ用ニ供ス(日本產物志)

歐羅巴諸國ニ於テハ最廣クヒキモノシ鋤匠サシモノシ斷工ノ用ニ供ス其製造ノ物品タル或ハ食卓或ハ臥榻或ハ鏟スキノ類或ハ麵棒ノ屬

或ハ杵或ハ磨機或ハ木履或ハ鞋摸或ハ鞋底或ハ盆或ハ銃

床或ハ鉋或ハ螺旋或ハ大形ノ版字或ハ器具ノ柄等枚擧ス

ルニ暇アラズ英國ニテ椅子製造ノ用ニ供スル爲メ毎年其

山林ヨリ要スルモノ一萬二千乃至一萬五千駄ノ多キニ至

ル佛國ニテハ輪ノ鞆ワケチヲ造リ又以前ハ板目紙ノ代リニ釘書

ノ用ニ供セシコトアリ土木司ハ椿ヒメヲ造リ又水中築礎ノ用

ニモ供ス造船匠ハ龍骨ヲ造リ又甲板ノ間ニ架スル梯ヲ製

作スルニ用ヒダリ必里尼斯山谷ノ人民ハ多シ棹ヲ造リ近

傍諸港ノ需用ニ供ス又比利時ノ或ル地方ニ於テハ嫩木ヲ

植テ籬牆トナメ甚堅牢ニシテ其觀美ナリト云

樹皮ハ以テ帽子ノ如キ輕キ物品ヲ納ル、匣ヲ製シ又籠ヲ

作ル葉ハ又彈力質アルニ由リ佛國田舎ノ人民ハ藁ノ代用

ニ供シ臥褥ヲ製ス其持久ニ至リテハ藁ニ優ルト云實ハ歐

洲ニ於テモ之ヲ食フ過食スレバ頭痛眩暈ヲ覺ユルノ患ア

リ豕亦之ヲ食フ

佛蘭西、日耳曼ニテ實ヨリ油ヲ搾ルコト我國ト一般ナリ

其質タル甚緻密ニシテ阿利襪油ニ次クト云山毛櫨ヒトチタル參兒ハ

「パラフィン」ノ多量ヲ含蓄ス灰ハ磷酸礐ニ富メリ



我國山民ノ習慣ト歐羅巴人ノ經驗トニ據ルニ「ブナ」ヲ伐

採スルニハ夏木液充分ニ循環スル時ヲ以テ最宜シトス此

時ヲ以テ伐採スルモノハ永久ニ耐持スベシ若シ夫レ冬時

伐木スルモノハ數年ヲ經ズシテ腐壞スルニ至ル彼ノ伐採

シタル大木頭ハ地上ニ直接セシメズ數月間背陽ノ場所ニ

据ヘ置クベシ然ル後其所用ニ應シテ之ニ斧鋸ヲ加ヘ又三

四ヶ月間水中ニ沈没セシムルトキハ蟲ヲ生スルノ患ナカ

ルベキナリ

「ブナ」ノ木材タル全ク之ヲ乾燥ニ保ツカ若クハ盡ク之ヲ

水中或ハ泥中ニ沈メテ保ツトキハ永久ニ耐持スベシト雖

モ乾燥ト潤濕トノ變更ニ暴露スルトキハ材面漸ク黄色様

ノ點ヲ發呈シテ腐壞スルニ至ル故ニ獨リ家屋建築ノ用ニ

ノミハ適スベカラザルモ薪ト爲スノ外ニ種々ノ用アルコ

ト此ノ如シ

外山正一

余之嚮ム人權新説の著者ハ質シ併せて新聞記者の無學を

賀と題せる一篇の文を草シ、學藝雜誌を籍りて聊ハ人

權新説著者を駁撃ホ一たれば、著者の學藝雜誌第十七號

外山大先生の駁撃を復駁すと題せる文を掲げて、最ト

切ム余の駁撃を復駁せらるるも、其全文中眞ム余ト

して感服セシむるものの特ム「余ガ非天賦人權者流トナ

セルカルナリ氏シエフレ氏等ハ皆進化主義ヲ信シテ始テ

實ニ天賦人權ノ存在セサルヲ悟レルモノナルコトハ其著書

ニ於テ明カナル事ナリ外山大先生ハ博涉強識ヲ以テ鳴レ

ル大學士ナレハ是等ノ書ハ夙ニ涉獵セラレシコト固ヨリ論

ヲ俟タサレハ余ハ敢テ贅言セサルナリ」と云われたる段

而已マて其餘の都て加藤氏ハ不似合なる強牽附會の御論

なれば、讀者をして特ム片腹痛ク思ハシむる而已ナリ、余

の駁撃ムして果て加藤氏をして斯の如く困却セシ然、斯

の如く氏をして強牽附會の説ト構造セシむるム至クシ然

んと最初より知りたらんハ、余ハ決て加藤氏を駁撃セ

ざリ一ものを、之を知らずして氏を駁撃せしハ、今更残念

批評

○負惜の強き人權新説著者ハ質シ併せてスペインセル

氏の爲メ冤を解ク



の至あり、去乍ら斯る牽強附會の御論を打捨置く時の慣性とあるの理あれば元來牽強附會の説を好まれざる加藤氏も牽強附會の説の味をえめられ、益々之を耽られてい最と口惜きことよかんはべれい、右様のことのなき様と只管と思ふ老婆心のもどしがたく、再び心を鬼おして加藤氏又質しまいらすること左之如し

加藤氏の「余ハ決シテ此ノ如キ似テ非ナル非天賦人權者流ヲ探シ出サント欲シテ骨ヲ折リタルニ非ス唯彼靜穩ナル天賦人權主義ヲモ併セテ駁撃スルノカアル眞ノ非天賦人權者流ハ未ダアラサルヤト種々ニ穿鑿シタルナリ而シテ靜穩ナル天賦人權主義ヲ駁撃スルハ特ニ進化主義ニ據ラサレハ能ハサル事ナレハ余ハ進化主義ヲ信スル人ニ於テ始テ其人ヲ探シ出スヲ得タリシナリ」と云はれたる、されバ加藤氏の御説お據れい、世は非天賦人權論者ありと雖も若し其人として進化主義者流よあらざらしめんよ、其人の如何程天賦人權を非とするものと雖も似て非ある非天賦人權論者あり、この人權新説著者の辨駁の爲よい、甚ど都合よき御説おれども、同じく眞底天賦人權を

非とする論者ありて、同じく權利の總て得有權利而已なることを信するものありて、ダルクウヰン氏スペンセル氏流の進化主義よ據らずして、其理を悟れる故而已を以て、貴様の如何よ天賦人權を排撃するも、如何程吾人の權利の得有權利のとなりと痛論するも、矢張天賦人權論者ありと云ひれてい、斯の如き論者の隨分迷惑あるとよてあらん、併しそれの姑ク加藤氏の仰の如ク靜穩なる天賦人權主義を駁撃するの特ニ進化主義よ據るものとせばミル氏の如き進化主義家よあらざるものが靜穩なる天賦人權主義と駁撃する論者よあらざることの最初より知れたることなるよ加藤氏が之を喋々せられい、將何の爲ぞ、加藤氏の今でこそ靜穩ある天賦人權主義を駁撃するの、特ニ進化主義よ據らさるべ能はず、杯と云ひるれども、最初人權新説と著されし時分よい、ミル氏の如き進化主義家よあらざるもの、中よも隨分靜穩ある天賦人權主義を駁撃するものもあらんやと思ひれしか、但し加藤氏の今でこそ「余ハ決シテ此ノ如キ似テ非ナル非天賦人權者流ヲ探シ出サント欲シテ骨ヲ折リタルニ非ス」杯と云ひるれど



もミル氏の如きの固より進化主義家よあらざれば、其似て非なる非天賦人權者流あること、加藤氏よ於ての萬々御承知あるべきよ、何の事新しうよミル氏が非天賦人權論者よあらざることと喋々せられしを以て見れば、最初人權新説を著されし時、似て非なる非天賦人權者流を探し出さんと欲し骨を折られしこともまんざらなきもあらざるか、孰よても著者の御好次第

加藤氏の外山正一の如きの全く人權新説の文意を誤解せしと云はるれども、加藤氏が人權新説第二十條よ「余モ亦從來天賦人權主義ニ心酔セシカハ曩ニ眞政大意、國体新論等ヲ著シテ其中ニ大ニ此主義ヲ主張セシカハ近日始テ進化主義ノ實理ヲ信セシ以來頻リニ天賦人權ノ實存ニ疑ヲ生セシカハソレヨリ諸氏ノ書ニ就テ天賦人權主義ヲ駁撃セシ説ハアラサルヤト種々ニ穿鑿セシモ未ダ一ノ駁撃者アルヲ見出スヲ能ハサリキ」と云われれば過激あると靜穩なるとを問ひ、天賦人權説と駁撃せしもの氏よ先立ちて一人もあらぬかりと云ふ意あらんと解せしよ、思ひざりき斯く文意を解せし全く余の誤解なり

とい、蓋し世の人權新説を讀みしもの中よ余の如き誤解をなさざりしもの將に幾人ありや、斯の如く明瞭あるものと見える文よして尙ほ且つ斯の如く讀者をして誤解せしむる位での加藤氏の書の如きの恐くの徹頭徹尾讀者の爲よ誤解せらるる所あるやも計るべからざ、あたらず發明の御説も斯く讀者をして誤解せしむる如き文章を以て綴られては、徒よ世人を惑ひしむる而已めて最と惜むべきことよぞのべるあり、二十條の文の如きの如何程念を入れて讀みても、今とかりて加藤氏が云ひるる如き意あは決して取兼ねるものと思はる、矢鱈よ人を疎漏なりと云ひる丈ありて、氏の疎漏からざるに又格別のことありあるあり

然り而して人權新説第廿條の文と前陳せる如く余が解したるに決して誤解よあらざると思ふ所以を説明かさん、蓋し第二十條の四行よ「諸氏ノ書ニ就テ天賦人權主義ヲ駁撃セシ説ハアラサルヤ云々」とある天賦人權主義の同條第一行よ「余モ亦從來天賦人權主義ニ心酔セシカハ云々」とある天賦人權主義と同一のものよして「諸氏ノ書ニ



就て天賦人權主義ヲ駁撃セシ説ハアラサルヤト種々ニ穿鑿セシモ未ダ一ノ駁撃者アルヲ見出スヲ能ハサリキ」と  
ハ則ち新政大意、國體新論者流の天賦人權主義を駁撃せ  
る説とあらざるやと種々ニ穿鑿せられまも、未だ一は駁  
撃者あるを見出されざりしと云ふ意あること明白あり、  
されハ加藤氏の爲メ大負メ負ても余は則ち眞政大意、國  
體新論者流の天賦人權主義を非とする説ハ決て新説メあ  
らざることを證明せるものナリ余ハ眞政大意國體新論者  
流の天賦人權主義を駁撃する説と陳腐あることを過激な  
る進化主義者流の加藤弘之氏ハ憚乍ら示しまいふせたる  
ものナリ

加藤氏はベンザム等は「唯過激ナル天賦人權説ヲ駁セシ  
モノニシテ更ニ靜穩ナル主義ヲモ併セテ駁シタルモノト  
スベカラサレハ余ハ右等ノ説ヲ以テ實ニ全ク天賦人權説  
ヲ駁シ了レリトハ云フ能ハサルナリ」と云われしを、去  
れば良やベンザム等の天賦人權説を全く駁了し了らざるま  
ものとするも兎も角天賦人權を駁せしものなれば、加藤  
氏ハ先立ちて天賦人權を駁せしもの、夥多ありしことハ

則ち氏ハ自ら許さるゝ所メあらずやされバ、「諸氏ノ書ニ  
就テ天賦人權主義ヲ駁撃セシ説ハアラサルヤト種々ニ穿  
鑿セシモ未ダ一ノ駁撃者アルヲ見出スヲ能ハサリキ」ハ  
とい不當千萬の語と云はざるべからむ加藤氏の「佛國顛  
覆以來過激人權説ヲ駁撃セル學者ノ世ニ多カリシコトハ既  
コ之ヲ熟知セリ」と云はれたり、加藤氏がボルシ、ベンザム、  
ウルゼー、ルウ井ス、エマス等ハ外山正一ハ申上げ  
ざりし以前より、又ヘーゲルのこと杯ハ明治記者ハ御教  
示申上げざりし、とんと前より程よく御承知メてあ  
らせられしこと取らば一寸一言其趣を人權新説へ御載せ  
置れよありらんや、折角ハ御新説を余輩の如く誤解  
する者もあらざりしものを、最と惜むへ、加藤氏の「哲  
學政治學等ノ字書中人權若クハ性法ノ部ヲ披ケハ過激人  
權説ヲ非トセシ論説ハ實ニ夥シキコトナリ」と云はれたる  
其過激人權説を非とせし論説の夥くある字書類ハ如何  
なる書名よと誰々の著に係るものあるや、其邊の所を余  
輩淺學の者の爲メ御教示あらんは如何許り幸ふと  
あまたらんものを、ろこを唯漠然とやられたるを最と惜



むべきことにある、  
 假し一步を譲り加藤氏の静穩なる天賦人權説を非とせし  
 ものハ氏ハ先立ちて一人もあざざりなりと云われし  
 ものと異なるも、矢張加藤氏は先立ちて非天賦人權論者の  
 多くありあり、何となれば余の曩も引證せる人達の内  
 多の過激あると靜穩あるとを論せし全く天賦人權を排撃  
 せし人々あればなり加藤氏のベンサム等は唯過激の天賦  
 人權主義而已を駁撃せしものなりと主張せざるれども、  
 決して然らずベンサム等の特は過激なる天賦人權主義を駁  
 撃せし而已であらずして廣く天賦人權主義を排撃せしもの  
 のさるとい、嚮も余が學藝雜誌を籍りて引證せし諸氏の  
 説も就て見んよ昭々乎として明かり、又加藤氏のベンサ  
 ム氏が專ら佛國顛覆黨を關して天賦人權主義を排撃せし  
 故を以てベンサム等の唯過激の天賦人權主義而已を駁撃  
 せしものなりと云ひるれども、この大酒飲が酒の藥なり  
 と主張するを駁し酒の決して藥のあらずなり、酒の一滴  
 るも有害なる者なりと云ふ者を指し、此奴の如何程酒  
 の有害あることを説くとも、其説たる大酒飲を駁撃せん

爲し立てたる説あれば、眞底の矢張酒の藥なるを信ず  
 る者なりと云ふと同じ、又加藤氏が如何程靜穩なる天賦  
 人權主義を駁撃するものなりと自身より云われ實は立派  
 なる非天賦人權者流なりと思ひ居らるるも彼の人權新説  
 の如きの職として吾邦の過激民權者流を猛省せしめん爲  
 し立てられたる説あれば加藤氏の矢張似て非なる非天賦  
 人權者流なりと云ふと同じ。  
 加藤氏の余がホルン氏ベンサム氏等と共にウルゼー氏エ  
 マス氏等を引證したるを見てウルゼー氏エマス氏等の  
 如きも矢張ベンサム氏と同時代の人にて佛國顛覆黨の過  
 激主義を痛く駁撃せんが爲に説を立てたるもの、如く思  
 ひるゝ如くあるをいふも、ウルゼー氏エマス氏等の皆今世の  
 人物にて其説の一般は天賦人權主義を駁撃するものより  
 て決して強ち顛覆黨の過激主義而已を駁撃せん爲し立て  
 たるものとはあらざるなり  
 加藤氏がベンサム氏を認めて強て天賦人權論者とあざん  
 とせたるゝの最と可笑し、加藤氏の纒も或る獨逸書よべ  
 ンサム氏が普通選舉論者あることの載せあるを見られて



普通選舉論者ならば必は天賦人權論者であらんと臆測せられ、ベンサムベンサムの主義杯の九飲と云ひぬ計の勢にて説き出さるるの如何も輕躁の様を見ゆれども自身より輕躁を思はれぬと見ゆるを、そをよりも尙ほ甚まき、スเปนセル氏の吾人々類の他動物而已取す植物と同源又出てたるものたることを最も分明に説かるる所の進化主義家あるも、加藤氏のスเปนセル氏の權衡論を自ら誤解せらるるの知られずして、威氣揚々としてスเปนセル氏其人の如きも自身の立派なる非天賦人權者流かと思ひ居ることなるべけれども、其實の矢張吾人々類の眞の他動物と同源又出てたるものなることを知らざるも、スเปนセル氏に杯と云はれたることを抱腹絶倒の至かれ、併しミル氏の如き大學者として尙ほ且つ加藤氏と殆ど同一ある點も就てスเปนセル氏を誤解せし例もあきば、加藤氏が斯く輕躁なであらせらるるの爲も最も惜むべきことあるれども、スเปนセル氏を誤解せられんとてさまざま怪むおと足らざるを、然れども加藤氏の博涉強識を以て鳴れる大學士かれスเปนセル氏は哲學原理、生物學の原

理、性理學の原理、社會學の原理並にスเปนセル氏に誤解を正さん爲しミル氏を送られざる手紙等の夙は涉獵せられしことは恰も余のカルテリカルテリ氏シエフレシエフレ氏等の書も置けると同様ならんこと固より論を俟たざれば、スเปนセル氏を誤解するもの加藤氏あらずして余並に余の如くスเปนセル氏と解する輩あらんこと疑なし

加藤氏の「余の特ニルーツウ氏及び佛國顛覆黨ノ主張セル過激ナル天賦人權説ノミヲ天賦人權説ト認メテ駁撃セシニ非ス更ニ近世ノ諸學士中ニ行ハル、最モ靜穩ナル天賦人權主義ヲモ併セテ全ク非トセシナリ」と云はれざるの一應之甚た御最の様を見ゆれども人權新説不就て見るも加藤氏の駁撃せられたるの全く過激なる天賦人權説のみおして、靜穩なる天賦人權主義をも併せて非とせらるるの如何も思はれぬなり何となれば人權新説の如きの卷首より卷尾まで始終罵詈訾然とすたる語を用ひられ、反對論者との常よ之を妄想論者と呼び其説く所や其舉動の如き之を指して或い妄よと云ひ或は恣よと云ひ或は輕躁と云ひ或は急劇と云ひ或は過激と云ひ或は急躁と



云ひ或の輕舉と云ひ、僅々百五ペイシとなるあらざる  
 小冊の書あるよ「恣ニ」の語の四度「妄ニ」の語の十一度  
 「妄想論者」の語の如き、實は廿九度の多にみ至れり、余  
 の淺學の故もや斯る小冊の書よして斯の如く罵詈然とし  
 る語も富みたる書と近頃禁止せられたる有喜世新聞を  
 除きて、之の初てあり、されを余の人權新説の如き、唯  
 過激の天賦人權説而已と駁撃せんが爲も著されしものと  
 看做とも決して不當のことといふあらざるなりと思ふあり、  
 これでも靜穩なる論者を駁撃せん爲も著されしものを  
 けハ若し過激なる天賦人權者流を駁撃せん爲も一書を著  
 させたらんか如何程罵詈の語を用ひらるることならん  
 や、蓋しそれこそ前代未聞の新説とも云ふべきものよを  
 あるかたん  
 加藤氏の「靜穩ナル天賦人權主義ヲ駁撃スルニハ特ニ進  
 化主義ニ據ラサレハ能ハサル云々」と云はれたり、若し果  
 て然らば加藤氏其人の如きも或の似く非なる非天賦人權  
 者流あるやも計り難し、何とかれの若し氏の主唱せらる  
 る所の進化主義よして眞の進化主義よあらむして似く非

なる進化主義ならんもの、自らの立派なる非天賦人權者  
 流ありと思ひ居らるることも、其實の矢張靜穩なる天賦人  
 權者流の範圍を脱せられたるものよあらざるべけれど  
 なり然り而て人權新説よ、就て加藤氏の進化主義を考ふ  
 るか、氏の進化主義の如き、果て眞正の進化主義と云ひ  
 得べきものなるや否の容易に判決する能はざるものか  
 り、其理由の一二は左の如し  
 第一 加藤氏の人權新説第七條は競争の種類を歴舉し、  
 寄生木か他樹の水液を吸収するの類を以て其一に居るも  
 の、如く云はれり、此類のもの疎漏もヘツケル氏の  
 書杯を讀みよらん人かこそ眞正の競争の如く見ゆるべけ  
 れども此等の決して眞正の競争にあらず、特は似て非なる  
 競争あることタルウヰン氏の書よ於て明あり、蓋し  
 ツスルトの如き寄生木と其寄て以て棲生する所の樹木  
 との關係の如き、眞正の競争よあらざる所以、若し一  
 樹よ寄生するもの、餘り繁茂することあらんか其樹  
 木をして枯死せまむるよ至るかたん、其樹木よして枯死  
 せば其寄生木も共は枯死せざるを得ず、されは其寄生木



の爲よ其寄生する所の樹木を餘りよいぢ然るに却て不利なることよぞある、蓋しタルウヰン氏の云へる如く一枝よ棲生する寄生木仲間中おこる真正の競争のあれ、寄生木ト其寄生する所の樹木との關係の如きに似て非なる競争と云ふべきものなり

第二 加藤氏の優勝劣敗よ公正なるものと不正なるものとの區別あきて開明社會の優勝劣敗こり公正なるものあれども、動植物の間よ行ゆる優勝劣敗の如きに不正なるもの、如く云ゆるれども動植物中の競争が不正なるものなり杯とい實よ新奇なる御説なり

第三 優勝劣敗是天理矣杯と立派よ云ゆれ乍ら加藤氏の眞底の矢張時としての劣勝優敗杯云ふことのおよと思ゆるよ必れ除られぬものよや、近日社會黨共有黨虛無黨等の如きもれ益々猖獗を極え先んとする如くなれども、こと全く僅々の首魁等よ煽動せられて一時狂暴を逞くするよ外ならされバ決して永く社會に大勢を左右するよ足るべき勢力を得ること能はざるに必然ありと自ら云ゆれとすものよ、頻よ此等の輩が猖獗を極え先んとするを

見られ、殆ど狂氣の如くよなられて憤らるるに甚た怪むべきことよある、虛無黨者流の果て劣者からバ此輩が勝を得んこと固より出來ることなれば此輩が猖獗を極え先んことと恐怖する理は萬々あき筈なり又加藤氏が云ゆる如く優勝劣敗の作用の一秒時間も行ゆれざることなきものなれば、縱令一秒時間たりとも勝を占むるもの則ち一秒時間の當然勝と占むべき理由ありて勝を占むるものなり則ち一秒時間丈の優者あるものなり、凡そ優者たり劣者たり日月お變更せざるをなし、或て一秒時間優者たるものあり或て萬年の間優者たるものあり、而て其優者たるの置位を占先て居る時の長短よこり斯の如く異同のあれ、當時よ在ての齊く優者あり、一千七百年代の末よ佛國よ起きたる顛覆黨の如きにナポレオン黨よ比してこり劣者あれ、王黨よ比しての固より優者ありものあり又ナポレオン黨の如きに顛覆黨を壓倒なせし後久き間優者なりしと雖もウオートルの敗北の爲よ又劣者となり、而てナポレオン第三世の時よ至りて再ひ優者となりたれども今日よ在ての共和黨の爲よ勝と



占められて又劣者となれり、凡事物の存在とるや其存在  
 すべき理由あるよあらずして存在とるものあらざるあ  
 らん、往時佛國の顛覆黨の如き現時諸邦の社會黨の如き  
 一秒時間と雖も存在すべき理由なくして存在せんものよ  
 いふさるあり、其存在とる時又當て存在はべうらざる  
 ものの存在とる杯と思ふと甚た不條理ある考あり加藤氏  
 が過激民權者流か猖獗を極むるを見られて、猖獗を極  
 むべからざるものか猖獗を極むる如く思ひれて譏諷  
 罵詈置く所なきと蓋し過激民權者流をして後々劣者さら  
 し然んとせらるる一手段あるか、果て然らば馬を知らん  
 過激民權者流か天賦人權を主張とるも又優者たらんとと  
 るの一手段よあらざるを  
 加藤氏の眞正の進化主義者流ありとい未だ容易に判決す  
 る能はざること、右等一二の理由ふて既お明なれば他の  
 理由の之を略す氏よして若し似て非なる進化主義者流た  
 るよ過ぎされば、氏も又一の似て非なる非天賦人權者流  
 たることを免るゝ能はざるものあり  
 余の將よ此駁論を畢らんととるよ當り彼我の論旨を略記

せんよ則ち

加藤氏の主張せらるる論旨の左の如し

第一 靜穩なる天賦人權主義を駁撃するの特に進化主

義よ據らされば能はざることを

第二 ベンサム等の特に過激なる天賦人權主義を駁せ

しものあること

第三 スペンセル氏の吾人々類の眞は他動物と同源よ

出てさるものあることを知らざることを

第四 靜穩なる天賦人權主義と駁せしもの、加藤氏並

み一二獨乙人よ限ること

第五 加藤氏の過激なる天賦人權説のみならず最も靜

穩なる天賦人權主義をも併せて駁せられしこと

第六 加藤氏の似て非なる非天賦人權者流を探し出さ

んと欲して骨を折られたりしこと

第七 加藤氏の自身ころ此上もなき眞正の進化主義家

ありと思ひ居らるること

余が加藤氏よ返して主張とる所の論旨の左の如し

第一 近時の進化主義家よあらざるものよも靜穩なる



天賦人權主義を駁撃せしものあること

第二 ベンサム等の特小過激ある天賦人權主義を排撃

せしものよほすして總て天賦人權主義を排撃

せしものあること

第三 スペンセル氏の吾人々類と他動物而已ならん植

物と同源よ出てくるものなることを主張する人

あること

第四 靜穩ある天賦人權主義を駁撃するもの、加藤氏

並よ一二獨乙人よ限らざることを

第五 加藤氏こそ却て過激ある天賦人權主義而已を駁

撃せられし人の如く見ゆること

第六 加藤氏の最初の進化主義家よあらざるもの、中

よも靜穩なる天賦人權主義を駁撃せしものもあ

りと思われしか但し似て非なる非天賦人權者

流を採し出さんと骨を折られよ相違なきこと

第七 加藤氏の進化主義の甚く怪しきものあること

加藤氏の牛込の天狗の鼻をひりかれよと自ら思ひ居ら

るよと雖も果てひりがれしか覺束あし

牛込の天狗の鼻の堅うして

加藤の齒に合ひぬるもの

さて又番町の天狗の鼻の如何

番町の天狗の鼻の碎けたり

つかんとしてもつぐ術のな

雜錄

○儒論下

杉浦正臣稿

儒學之盛衰。國體之榮辱係焉。吾每讀漢史。未嘗不慨嘆於此也。夫秦漢以前。老墨之說。焚坑之舉。非無攪儒風也。然學風淳樸。士皆善道脩行。元氣之所磅礴。有隱然不可犯者焉。當是之時。西戎北狄。非不大也。非不强也。而竟不能染頤于九土者。非以是耶。如漢儒。亦能修所謂專門之學。龍錯賈誼董仲舒之輩。其學或非無瑕疵。然能行其所學。未失儒之爲儒也。是以當時風氣凜然。匈奴數窺邊。而未能闖入於中原也。至漢末。學士多以浮華相尙。儒風漸衰矣。於是乎有黨錮之變焉。及魏晉之際。則道學盛行。俗尙清談。雖儒者不免爲其所浸染也。如王衍何晏稽阮之倫。沈溺虛恬。而忽忘人事。儒



學之衰。未有甚於是時者焉。於是乎胡狄得鳴鼓而進。則天下四分五裂。而不可收拾也。是非儒學不明。紀綱不振之所致乎。至六朝則儒風墜地。流俗浮靡。加之老佛乘釁而起。蕭衍之捨身歸佛。蕭鐸之戎服談玄。時風可徵矣。北魏以胡種制禮作樂。非不知貴儒。而又建佛圖求佛書。則氾氣之所污染。有不忍言者焉。及隋之世。儒道復興。稱為漢魏以來之運。雖以李唐學問之盛。亦不得不推首功於此也。如唐十八學士。概莫非有用之士焉。而韓柳之徒繼起。其學雖未全得孔子之旨。然至其一洗六朝浮靡之弊。則不為無裨於時也。故自隋而終唐之世。胡狄屏息于漠北者。三百有餘年矣。而及其季世。儒學復衰。以馴致乎五代。則如李存勗石敬瑭劉知遠。皆以夷種。入為中原之主。亦莫不基於儒學不明紀綱不振也。及宋定天下。儒風再興。二程朱陸之徒。接踵而出。然其為學。概有体而無用。議論繁而實效少。則與孔子之旨相去益遠矣。若夫程伊川之禁人主折柳條。陸秀夫之航海講大學。可謂迂而固矣。當宋之世。北胡強盛。垂涎金甌。則當講實學振國風。而諸儒徒談空理。而不求實效。遂舉其所謂聖王之域。付諸其所謂夷狄之人。是雖時勢之使然也。亦其空理之學使

之然也。如胡元之世。非無耆宿也。然滿世既陷於蒙古。則縱有文儒之可觀。諺所謂張三飲酒李四醉者。固不足論也。而學者猶且稱之。不亦悲乎。及朱明之世。王守仁唱良知之說。以矯時弊。不可謂無功於世也。而要之其所行。亦或有負其所言者焉。蓋實學之衰。數百千年。雖豪傑之士。不能免其弊也。而弊風之極。竟為滿清之所吞併。可不嘆哉。由是觀之。儒學之於國體。其盛衰榮辱之相係。豈非淺鮮也。然則儒者之任。可謂重且大矣。而後儒不察。徒以筆舌為務。至國體之榮辱。則漠然若不相聞者焉。其如此。何足以維持四海利澤萬世乎。何足以稱儒乎。嗚呼。儒道之弊。一至於此。果誰之過也。後之為儒者。豈可不鑑戒於此哉。

○耶蘇辨惑序

井上哲次郎

或奉彼教。或奉此教者。無不出于偶然。東洋之人終身不知耶蘇教者有焉。西洋之人終身不知佛教者有焉。乃知人之信耶蘇教信佛教。皆因其所居之地而然。非因人之賢愚與教之真偽也。然則或奉彼教。或奉此教者。原出于偶然焉耳。其信與不信。唯從己之所好而可。雖然如耶蘇教。不啻其旨虛妄。其蠱國賊人。比之佛教更為甚矣。若使我邦人信之。則其弊害



將有不可勝言者。」頃讀邸報。三府四十一縣。無處無耶蘇教。舉其教派。屬布勒的斯丹德教者。教會九十一。會員三千八百八十一。教師一百六十四。會堂四十九。說教所二百二十一。屬正教者。教會九十二。會員五千六百人。會堂十二。說教所二百二十八。教師數十人。屬天主教者。教徒二萬五千四百餘人。教師四十餘人。而其員數日增月益。殆將無所底止。是雖因科學之不興。而亦因無論耶蘇教之妄謬者。今自政治上而論之。其害有二。夫國家之所以立。在民心不分離。苟民心分離。則國家何以立乎。今我邦人有信耶蘇者。其心之所向。必浮慕艷稱其教所由出。而賤蔑不奉其教之國。如此則民心分離。而國家之基址壞矣。是其一也。耶蘇教之感動人心。固非佛教之比。蓋佛教由理導人。耶蘇教由情誘人。且耶蘇之言易曉。而佛之真意最難解。是以人之心醉于耶蘇教。實有甚於佛教者。試歷覽泰西之史乘。爲耶蘇動干戈。殺戮無辜。紊亂政治者。續々不絕。反之我邦自古爲佛教動干戈者。寥寥無聞。然則耶蘇教之東漸。爲流鮮血之始。是其二也。」自道德上而論之。其害更有甚焉者。何也。兩約書中所載不經之事。不一而足。今舉其太甚者。創世記云。該隱攻弟亞伯而殺之。

是兄弟相攻之始也。又云。亞伯拉罕有二女。姊謂妹曰。吾父已老。天下無我配。不若飲父以酒。而與同室以存後裔。竟如其言。次日姊使妹亦與同室。是父子亂倫理之甚者也。民數紀零云。摩西曰。今宜殺壯男及與男同室之婦。而獨存未與男同室之童女。是亦殘忍之行也。馬太傳云。耶蘇之母馬利亞爲約瑟所聘。未婚之先。既由聖靈孕。果然則聖靈豈爲姦通耶。兩約書之不經率如此。若使人信此書。其害道德甚大矣。」自學問上而論之。其害爲最甚矣。昔哥白爾尼沽斯著書以唱新說。然以其言與經典不相合爲僧徒所禁。加里列阿亦唱地動說。爲僧徒所執。如嘉爾擅幹巴涅刺伯爾挪瓦尼尼諸氏皆好學之士。奮發興起。一時相爭講真理。不顧其言與經典相背馳。僧徒怒刑之。殊瓦尼尼伯爾挪二氏俱爲所生焚。悲夫。倍謨亦爲一世之豪傑。著曉光篇。以唱無神說。僧徒怒之。禁人讀其書。如斯比諾利亦爲僧徒所恐嚇。其他爲僧徒所刑者三十四萬人。其中所焚殺者三萬二千人。甚矣哉耶蘇教之害世也。不徒使人陷于塗炭。又使真理不顯于世。甚矣哉耶蘇教之害世也。」然而世俗之溝壑習儒。嚙々然不知其所非。既自妄信。又從而誘惑愚夫愚婦。招國家之禍害。實不尠々。蓋信



耶蘇之徒。心竊謂泰西之人學問技藝最精。非我邦人所企及。而問其所奉則耶蘇教。耶蘇教亦與彼學問技藝同勝我教。我邦人之不信之。蓋因其智之未開焉耳。殊不知泰西雖不乏豪傑之士。而其民之愚昧與我邦人無異也。又竊謂苟信耶蘇則死後無耶蘇亦無妨。若有耶蘇則其幸如何也。不信耶蘇之危。不如信耶蘇之安。乃為耶蘇拋金錢。惠貧賤。其行雖似仁慈乎。其意在得報酬于來世。若知不得報酬于來世。何復惠貧賤為哉。嗚乎信耶蘇者。雖曰無幾欲之心。吾不信之也。雖然世之蚩々者。據俗儒之言。而尊信耶蘇。其弊之所極。必至守邪說而惡真理。信不經之事而亂倫理。外日本而內異邦。今而不撲滅之。則將致不可救之災矣。一外山、山先生學問淹博。識見超邁。世人之所稔聞。頃著耶蘇辨惑一卷。屬序于予。予受而覽之。其文之巧拙姑置之。其駁擊耶蘇。徵于古今。證于東西。橫說豎說。不遺餘力。可謂快筆矣。此書一出。則耶蘇之徒果為如何之感耶。予欲刮目見其所為。乃不顧謫劣。敢題所見乎卷端云。明治十六年二月

○寄中村敬字先生書

井上哲次郎

哲謹白敬字先生座下。嚮者訪先生。質以詩文。先生幸不相

拒。辱賜教諭。哲之喜可知也。蓋如先生所言。皆閱歷之事。固非後生所間然。雖然有與心中平生所蓄稍相異者。豈得不質之于左右哉。先生曰。凡詩文尚實事。不尚想像。哲竊謂詩尚想像。不尚實事。唯文尚實事耳。蓋絕佳之景非常可見者。有時乎顯于天地間。絕奇之情非常可感者。有時乎發于人間世。此絕奇之情與彼絕佳之景。想像而寫出之于一篇之詩中。則妙豈可言哉。若夫唯寫眼前之景與日常之情。則平平俗俗。徒使人厭饜耳。故泰西之詩人以想像為主。如照薩氏談話篤斯邊撒氏女王傳彌兒敦氏失樂園。無一不出于想像。而天下藉藉稱之。然則詩以出于想像却為妙。一先生又曰。文尚簡約。不簡約則不傳。哲竊謂文雖非不尚簡約。而有時乎尚周到詳密。請試論之。今夫以漢文比洋文。大有相異者。何也。漢文簡而約。洋文詳而悉。是非出于偶然。抑亦有以。泰西人學問深邃。思想精緻。迥出支那人之右。以故其文詳而悉。不詳而悉。則何由而傳其學問。何由而通其思想。此所以其文之詳而悉也。支那人於文明之度。未及泰西人。往往偏于修辭。而踈于究理。以故與泰西上古之人同尚簡約之文。是由其學問之未深邃與其思想之未精緻焉耳。一泰西固有尚簡約之文者。如潤遜



亞治異諸氏是也。而支那亦非無好暢達之文者。如宋潛溪唐荆川諸氏是也。然而倍根之高古則韓昌黎當之歟。勃爾克之流暢則王半山當之歟。麻高禮之富瞻則蘇東坡當之歟。瑤景西之雋雅則曾南豐當之歟。唯至韓圖歌傑爾依謨彌爾斯邊薩其他近世哲學家之深透委曲。則於支那四百洲。絕不見其比。如程朱陸王。亦不足稱其匹也。是豈不以無深究真理者文辭未滴述幽微之意故耶。果然則隨學問之進步與思想之發達。而文辭亦不可不變。若夫學問與思想並進。而文辭獨存古風。則其不適實用也明矣。現如我邦。洋學東漸。文教旺盛。學問日極其奧。思想日窮其精。而日常所用。唯俗文而已。漢文則以其存古風也不適實用。而全歸文人之手。文人往往學淺識卑。賣文以為家計。居常唯文字之弄。絕無以學問為基礎。而振興此文之概。偶覽其文。如滑稽。如戲謔。而至議論則不合論法。又不本于科學。以故文雖簡約。而義理矛盾。莊子所謂滑稽之耀耳。且夫今世文人。瓣香唐宋八家殊甚。字字擬韓柳。句句摸歐蘇。不似韓柳歐蘇之文者。舍而不顧。而不知泰西更有深透委曲。發揮天機之雄文。蓋古之人亦各有所據。就泰西而言之。照薩氏談話篇出于勃加智阿氏。斯邊撒氏女

王傳本于亞里阿私篤氏。彌兒敦氏失樂園淵源于和默威兒日爾二氏。舍克斯比亞氏所著。亦非皆無根據也。就支那而言之。韓昌黎本于孟子。柳柳州以國語為祖。歐陽廬陵基于韓文。蘇東坡宗戰國策。曾南豐出于新序。雖然古之人不啻自鎔鑄而后出之。又多少有所出機軸之處。今之文人則不然。兀兀徒浮沈于古人之圈套中。而毫無所自出機軸。其文雖時有可稱者。而非可傳千歲者。傳之固無害也。然亦何益之有。強欲傳無益之文。抑又何心也。蓋文也者非唯其簡約故傳也。又非唯其周到詳密故傳也。別自有可傳者而后傳也。何謂可傳者乎。曰。其事其理是也。其事其理不足傳。則欲傳之亦不可得也。夫然而文非周到詳密。則其事其理有難能述者。故曰有時乎尙周到詳密。泰西亦有謂文尙簡約者。哲竊以為名說。何者其文既周到詳密。而將流于冗長故也。雖然於我邦決不可唱此說。何者。其文既簡約而將過于短小故也。短小之文雖不必惡。而幽微之意。到底難由此而述。故哲竊不取也。但古之文多短小。短小故義理不明。至後世解者紛紛。今也學問與思想並進。而大有異于古者。豈可與古人同作短小之文哉。短小之文恐不足傳也。然而世之文人或不知之。而欲傳其不可傳



之文。豈不可笑之甚耶。」先生出于耆宿凋落之後。學兼東西。胸膺古今。而德望高于一世。矯世之弊風者非先生而誰。嘗竊望先生據論法。本于科學而振興此文于千歲之下。與泰西諸大家駢鑣而馳聘。然而今先生唯言文尚簡約而止。而如不取夫周到詳悉之文。夫未讀洋書。頑傲拗戾。埋沒于漢魏之蠹書中者。而發此言。則固不足怪。學問之博如先生。識見之卓如先生。而亦發此言。則哲之所見。全出于謬誤耶。先生溫厚慈仁。胸宇天大。不咎哲之不遜。以哲為可教。而賜一書。則哲之幸莫大焉。恐懼再拜。

○以寒夜客來茶當酒之字各為韻得古体七篇

竹翠漁父

數奇憐鄒孟、高潔憶謝安、案上書千卷、剔燈坐夜闌、百年誰是真知己、瘦梅枝上古月寒、

評云、是誰數奇誰高潔、瘦梅枝上一痕月、

枯木鳴寒颼、寒蟄訴深夜、誤機常後人、守愚不待價、自笑筆硯猶未焚、十年碌碌老客舍、

評云、筆硯不焚真碌々、韞藏良價亦非福、

憫笑名利客、以心為形役、喋々醇化論、紛々自由策、霜滿寒

林泉將冰、有人夜半讀周易、

評云、的是山中高士家。誰知我者白梅花、

爐頭茶正熟、有友抱琴來、撫絃無一語、松風吹琴臺、先生之樂在遊戲、人道先生心既灰、

評云、遊戲只當為散仙、人間可有死灰燃、

武陵天台客、管見如井蛙、春秋戰國士、言論半浮華、北風蕭索雪亂點、寒梅香裏獨煎茶、

評云、直以仙人為井蛙、極無理處似南華、

局外且弄碁、黑白自得當、日々醉如泥、意氣儘放宕、生前錦衣玉食人、死後又登麟閣上、

評云、麟閣如今遺臭耳、不如老死茅堂裏、

悲歌倚高樓、撫刀望北斗、舉杯罵世人、傾盡千斛酒、二十餘年夢亦醒、半簾梅影敲茶臼、

評云、狂生咄々不須嗟、太勝老○○茶、

槐南曰、首々痛快、似嘲似罵、如歌如哭、如神仙咒、似禪僧偈、卒讀之餘、各下一轉語、所謂佛頭着糞、恕

罪是幸、

○守歲擬古詩行行重行行

森槐南



凄々復凄々。守歲如傷離。今夜朔風厲。明朝天一涯。錢爾一杯酒。究賤何所悲。葛屨可霜雪。豈曰吾無衣。塵沙我髮亂。風雪我骨斷。苦志不可磨。痛哭淚如霰。奄忽二十年。百年一憂患。婦曰爲改歲。破屋良可歎。墮戶寒月入。穹室黥鼠竄。夜半鷄鳴。膠燈黑且。

井上巽軒曰、聞君以詩爲命、果然則當言富貴如浮雲、何復痛哭揮淚爲乎、呵々、

○運 大竹みどり

此詩原ブレット、ハート、ノ作ニ、僅々三章一百字、妙味蓋シ言外ニアリ、今之ヲ意譯ス譯語ノ拙ナルヲ以テ原詩ヲ推スト勿レ

暴風あらしよ雨を吹きまぜて

海面うみづらさこそと思はるれ

今日けふの漁業すなざり休みなん

獸けものの踪あとを尋ねん

岩間いわたまよ吼る獅子ししもあれ

今日けふの山獵かみ休みなん

海うみよ幸さいちある舟子ふねこ共

此所こゝも彼所あつても怪我けが人の

寄書

左ノ一篇ハ松原新之助君ガ河豚ノ毒ニ就テ試験セラレ

凡ソ毒魚ノ人ヲ傷フモノ枚舉ニ違アラヌ或ハ毒ヲ体内ニ存シテ人ヲ害スル者アリ或ハ利器ヲ体外ニ具シテ人ヲ傷

前端ニ一劍ヲ具ヘあかゑハ之ヲ其尾根ニ具ヘ又鹿兒島

縣下大島近海ニ産スルかはじハ尾根ノ両側ニ之ヲ具ヘ若

シ人之ニ觸ルレハ乃之ヲ刺傷ス又其毒ヲ体内ニ蓄フル者

肉ヲ食スルハ忽チ之カ毒ニ中ル又或ル魚ニシテ有毒ノ



海虫ヲ食フニヨリ殊ニ其肉ヲ食フキハ忽チ毒セラレ、  
 アリ殊ニふぐノ如キハ將ニ成熟セント欲スル卵中ニ含有  
 ス又其生肉ト雖モ調理宜キヲ得サルキハ能ク人ヲ斃スニ  
 至ル毒魚中ノ最モ懼ルベキノ者トス故ニ今本部  
 實驗ノ成績ヲ示ス此他卵、成熟ノ際ニ於テ毒ヲ發スル者  
 頗ル夥多アリ例之ハウサビ、ホコヒ、諸種ノ如キ又諸介類  
 ノ如キ比々皆然リ然リト雖モ其毒ふぐノ甚シキカ如クナ  
 ラス  
 夫レムぐノ有毒ナル普ク世人ノ知ル所ニシテ已ニ本草綱  
 目ニ肝及子有大毒又和漢三才圖會ニ腸胃後傍大骨有如胡  
 蝶形者青白色投水如動此物有大毒殺人<sup>猫犬亦食之乍斃</sup>トアリ然  
 レモ其中ニ見ル所ノ胡蝶形ノ者ハ即該魚ノ寄生物ニシテ  
 學名チ *Agga* ト稱スル<sup>エヒカニ</sup> 蝦蟹類ノ一種ニシテ未タ其毒アル  
 マ見ズ但 *Agga* ノ卵ノ成熟ニハ毒アルモ計リ難シ其肝臟  
 ニ毒アリト言フカ如キモ本部試驗上ニ於テ決シテ取ラサ  
 ル所ナリ曩ニ明治七年五月ニ於テ試ミニ犬ヲ絶食セシム  
 ルノ數日ニシテ之ニふぐノ卵巢及ヒ肝臟ヲ與ヘシニ忽チ  
 ニシテ煩悶嘔吐ス又少焉ニシテ再ヒ之ヲ食ヒ忽チニシテ

之ヲ逆吐ス斯ノ如クスルヲ數次後チ遂ニ之ヲ嘔下スルモ  
 復タ嘔吐スルヲナク其命ヲ全フセリ爾後明治十五年六月  
 廿四日ヲ以テ更ニ該試驗ニ着手シ實驗シ得ル所ノ經過及  
 其結果左ノ如シ  
 先試ミニ一牝犬ヲ絶食セシムルヲ二日牛肉四半斤ヲ取り  
 之ニ混スルニふぐノ卵半斤ヲ以テシ煎熟シテ之ニ與フ犬  
 之ヲ食スルヲ未タ半バナラサルニ頗ル厭惡スルノ狀アリ  
 暫クシテ又之ヲ食スルヲ少許終ニ眠リニ就ク大約卅分ニ  
 シテ忽チ起テ嘔吐ス此際腹部ノ波動スルヲ最モ甚ク而シ  
 毎十五分許嘔吐スルヲ五回終ニ血液ニ粘液ヲ混スル者ヲ  
 吐シ疲勞甚ダシク歩スル能ハス立ント欲シ僵レ行カント  
 欲シ止ム終ニ横臥殆ント死セルモノ、如シ而シ一時間ヲ  
 經テ少ク愈ニ是ヨリ先キ偶々犬兒アリ來テ其吐物ヲ食ス  
 ルヲ少許十五分ヲ經テ頗ル苦ム其狀母犬ニ異ナルナシ爾  
 後大凡一時間ヲ經テ母子共ニ去レリ翌日試ミニ之ヲ見ル  
 ニ稍シ疲勞ノ狀ヲ帶ブト雖モ別ニ異狀ヲ見ルヲナシ由テ  
 又ふぐノ内臟諸器官ヲ取り之ニ與ヘ試ムルヲ數次嘗テ前  
 日ノ如キ中毒ノ徵ヲ見ズ爾后又其卵ヲ取りテ播末漉過シ



テ其液ニ全量ノ蒸溜水ヲ混シ其十二瓦(三匁)ヲ犬ノ皮下ニ注射セシニ四十分時間ニメ倒死セリ是ニ由テ之ヲ見レハ其卵ノ有毒ナル固ヨリ論ヲ俟タス惜ムラシハ未タ其活魚ノ卵ヲ以テ之ヲ試ミサルヲ且ムクノ肉ヲ食シテ中毒スルハ調理ノ際其卵液之ニ浸染シテ其毒ヲ分與スルニアルト猶鯉ヲ理スルノ際誤ツテ其胆嚢ニ傷クレハ其胆汁全肉ニ波及シテ食フニ勝ヘザルカ如シ夫ノ業ヲ漁ニ取ルモノ、ムクヲ調割スルノ際其力ヲ骨ニ抵テズシテ其肉ノミヲ取リ以テ食用ニ供シ嘗テ中毒セサルカ如キ以テ之ヲ証スルニ足ル其之ヲ實驗スルニ毎回五月ヲ以テスル者ハ其地方ニ由リテ成熟ノ時期ニ多少ノ差等アリト雖東京近海産ノ如キハ常ニ五月ニ在ルヲ以テナリ然レモ今全國ノ比例ヲ以テ之ヲ推セハ四月ヲ以テ熟卵ノ期トナシテ可ナルカ如シ其中毒ノ多キモ亦此月ヲ以テ最トス今内務省衛生局ニ報スル所ノ地方中毒ノ月例表ヲ掲ケテ之ヲ証ス

自明治十二年二月至全十五年八月

三月 日ノ... 山... 七  
 四月 ... 二十四  
 五月 ... 六  
 六月 ... 三  
 七月 ... 六  
 八月 ... 八  
 九月 ... 八  
 十月 ... 五  
 十一月 ... 〇  
 十二月 ... 五  
 合計 ... 七十六

○越地瑣談 崇山居士

北陸ノ地ハ古ハ單ヘニ越ト唱ヘ紀ニ越ノ洲ヲ生ム記ニ越ノ沼川姫ヲ娶ルコトヲ載ル等早クニ史上ニ著レタル地ナリ蓋シ上世人類ノ多ク栖息シテ風ニ西南諸國ノ人ニ聞ヘタルヨリノコト、思ル居士久ク職ヲ石川縣ニ奉シ爾越加能ノ地ヲ奔走セシ際上古ヨリ近古ニ至ルマデノ遺事古跡ヲ見聞セシモノ樹カラズ記シテ以テ參考ノ一端ニ供ス



○越前國坂井郡丸岡城ハ柴田勝家ノ甥伊賀守勝豐天正四年豐原寺ノ城ヲ移シ築ク所ニシテ元祿八年ヨリ有馬侯ノ居城ダリ今ハ城郭皆ナ廢毀シ獨リ天主閣ヲ存ス居士先年丸岡ニ到リ土人ノ言ヲ聞ニ城地ハ繼体天皇ノ皇子椀子皇子ノ御墓ニシテ天主閣ノ側ニ存スル老杉樹ハ御墓ノ頂上ニ當ル標ニトテ植タル所トノ口碑アレハ維新後城郭ヲ毀チ樹木ヲ伐採セシ時モ夫ノ老樹而已ハ殘シ置タリ皇子ノ靈トテ上石木戸町ニ祭ル所ノ神祠ハ築城以前杉樹ノ邊ニアリシト云ヘリ越前名蹟考丸岡ノ條ニ丸岡トハ磨留古ノ乎加ノ轉訛ナリ繼体ノ皇子椀子王ノ故墟也ト云フ今其神廟上石木戸町ニ在リ俗ニ神明ト云フト記セリ居士土人ノ案内ニヨリ城地ヲ視ルニ築城以來數々變換シタリシモ陵墓ノ大形ヲ失ハスシテ東南ニ低ク西北ニ高ク城地之ヲ周リ西北ノ最高頂便チ天主閣老杉樹ノ在ル所ナリ西北ノ後面尤モ峻シク城池ニ臨ンテ自然質ノ岩壁現ハル謂フニ自然ノ丘陵ニ據リ築ク所ナラン之ヲ土人ノ言名蹟考ノ說ニ參証スルニ椀子皇子ノ御墓タルハ稍信スヘキニ似タリ今墓上ニ城クト云フ甚々暴慢ナル如シト雖モ戰亂ノ世ニハ

其例少カラズ松永彈正ノ多門城豐太閣ノ桃山城ノ如キハ皆人ノ知ル所ナリ又之ヲ陣所トセシハ木曾義仲ノ小田中能親王塚ノ御墓ニ陣スル東照公ノ茶臼山古ハ大墓ト唱墓タルヲ陣スル如シ蓋陵墓ナルモノハ平坦ノ地特ニ突起シ池溝之ヲ周リ或ハ連山中挺出スルノ山嶺又ハ連山中壕塹ヲ以テ之ヲ隔斷スル等ノ地勢ナレハ戰守共ニ便利ナラン

○加賀國ハ嵯峨天皇弘仁十四年癸卯三月越前國郡ノ内加賀郡ト江沼郡トヲ割テ置カル、所ニシテ其六月ニ江沼郡ノ五郷二驛ヲ割テ能美郡トシ加賀郡ノ八郷一驛ヲ割テ石川郡トナス(加賀郡ハ今ノ河北郡ノ地)然レハ江沼能美兩郡平衍ノ地ハ往古一面ノ沼澤ニシテ江沼ト云ヒ能美ト云フモ共ニ沮洳淮汚ノ意ナラン越前國北潟加賀國柴山潟今江潟木場潟皆ナ其沼澤ノ殘リニシテ近古マテモ池澤ノ多キ處ト見ヘ江沼志稿ニ板蕙記聞ヲ引テ曰ク此村往古山麓ニ在テ大村也山口玄蕃頭ノ時今ノ地ニ移ス往古ハ當村ノ邊沼ニテ菅群生スルヲ以テ菅波ト名付又福田村ノ條ニ板蕙記聞ヲ引テ曰ク下福田領ニ大ナル澤有リ狼ナト常ニ住



故ニ大澤ト名付(中略)又大池育池ト一ニシテ彼邊湖ノ如也ト今大池育池ハ入江ノ殘ル所ト云其比ハ池ノ向ヒ栗林有リ大澤ノ者船ニ乗テ粟ノ實ヲ落シ賣タルト曰フ村ノ古咄シ今按ニ下福田ニ粟役トテ有リシト云ト記セリ此頃金澤人高橋氏ノ報ヲ得タリ曰ク江沼郡勅使村ノ傍ニアル寶江山ノ麓ニ南面ノ横穴數多アリ多ハ入口埋レテ見エス又寶江山ノ後ニ稻脊谷<sup>イナセダニ</sup>ノ山ト稱スル圓形ノ山アリ此ニモ横穴數多アリ又近傍榮谷村<sup>サカヘダニ</sup>ノ山ニモ横穴多シ入口ニ石蓋ノ如キ者アルモアリ勅使村ニ彦吉トテ七十歲計リノ老人アリ此者ノ斷ニ十歲計ノ頃柴山瀉チ埋ントテ稻脊谷山チ崩壞セシニ一穴ヨリ長ク八尺斗ノ人骨顯レ傍ラニ卷物刀食器ノ如キ物ナトアリ皆朽テ取持コト能ハスト云ヘリト江沼志稿ニ菟憩記聞ニ曰ク此村ニ大塚有リ土民石槨ヲ堀出事有リ中ニ鎧或太刀ノ折レ差シ渡三步計リノ金輪瑠璃ノ緒<sup>ス</sup>ノ如キ玉數多有リ官府ニ相達進テ又埋置今其所ニ印ノ石有リ又文政七年堰山堀崩シ時横穴ノ内ヨリ骸骨チ堀出事有リ此内ニ異形ノ土器有リ色青シ骸骨<sup>ヒ</sup>ニ嶺ニ埋ム又記聞曰古十村<sup>トムラ</sup>大庄屋ノ次郎兵衛石切ニ命シテ宮ノ上山

際ニ有石チ切ラシムルニ石槨ノ蓋也驚テ元ノ如ク埋ム又宮ノ内ニ九尺許ノ石船有リ古ヘ那谷御普請ノ時持運テ此所ニ休足セシニ石船遂ニ不動ト今猶存セリト載ス以上記スル所ハ抄寫ノ際村名チ失シタルモ共ニ那谷ノ近傍ナリト覺ユ其文政七年云々ト云フモノ彦吉ノ話コレト同事ニハ非ルカ又高橋氏ノ話ニ江沼郡二子塚村ニ孖山アリ村名ノ起ル所ト云ヘリ按ルニ反正天皇ノ朝蘇我ノ同祖武内宿禰四世ノ孫志波勝足尼ニ江沼ノ國造チ定賜ル事國造本紀ニ載ス孖山或ハ此等ノ墳墓ニハ非ルカ江沼郡中猶富塚高塚ノ村名アリ二子塚ノ例ニヨレバ古墳ヨリ名チ得タルニハ非ルカ抑々上古衣食住ノ摸樣ヨリ推スニ專ラ南ノ山麓ニ住居シテ食ヲ其沼澤ニ索ル尤モ便利ナルヨリ次第ニ部落チナシ其國府ノ趾能美郡梯川<sup>カケハシ</sup>ノ上流ニ存セルヨリ考フルモ中古比ニハ此地方遂ニ一國ノ都會トナルマテニ群集シテ以上ノ趾跡チ存タルナルヘシ博學ノ士此等ノ地チ踏勘スルトキハ介墟又ハ穴居ノ跡ヲ發見スル所アラン因ニ云フ北陸ノ方言湖水チ稱テ瀉ト云フ和訓彙ニカタ瀉チヨムハ倭名鈔ニ見ユ干瀉ノ類也潮ノ引タル跡ノ形アレハイ



フナルヘシ萬葉集ニ涵モヨミ新撰字鏡ニ洲モヨメリト記  
 ス決シテ湖ノ義ナシ按スルニ居士ノ郷里ツ、ミト云フモ  
 ノハ汎ク堤ヲ築キ養水ヲ儲蓄シタル水マデヲ指ス堤ハ多  
 ク土手ト稱ス然レト邦訓ツ、ミトハ堤即チ土手ノ義ニシ  
 テ儲蓄シタル水ノ意アラズ蓋堤ヨリ水ニマデ及シタルニ  
 テ瀉モ亦恐クハ此ノ類ナラン

(以下次號)

○道德ノ大本ハ何ニ因リテ定メン乎 (前號ノ續)

添田 壽 一

凡ソ大本、或ハ標準、或ハ眞理ナルモノハ、人類ノ天然賦與  
 ノ情性ニ從ハザルヘカラズ、亦現在ノ社會ヲ保存セザル  
 ベカラズ、以上ノ兩元則ニ悖違スル時ハ、第一、之ヲ遵守ス  
 ルヲ難ク、第二、之レカ目的タル社會ヲ危クシ、結局自然ニ  
 逆フノ嫌アルヲ免レズ、然レバ以上兩元則ニ洩サマル爲  
 ニハ大要七條ノ所要アリ、乃チ

- (一) 永久不變ノ性ヲ具フル
- (二) 社會ノ改良進歩ニ有益ナル
- (三) 現在ト過去トニ全ク反對ノ跡アルベカラザル

一

(四) 火急慘酷ノ實ヲ有スベカラザル

(五) 安寧秩序ヲ害セザル

(六) 天賦ノ品格ニ應ジテ比例平等ヲ尙フベキ

(七) 時ト所ト勢トナ問ハズ、人類ガ遵奉シテ少シ

モ不都合、即チ危險損害ナキ

右ノ七要ヲ具備セザルノ道德、或ハ倫理ノ大本ハ、之ヲ以  
 テ眞正トハナシ難キナリ、故ニ世上ニ今日ノ宗教ヲ以テ  
 大本トナス、甚タ夥シト雖ト、余ヤ之ニ同意スルヲ得ザル  
 ナリ、其理由ハ今日ノ宗教ハ皆學術ヲ敵視スレバナリ、森  
 羅萬象ヲ以テ神ノ手先キトナシ、或ハ神ハ常ニ空中ニ奔  
 走シテ人類ヲ警視スル等ノ事ヲ固信シ、或ハ神ヲ以テ人  
 間ノ功勞ヲ經タル一種ノ動物トナスカ如キハ、憫然ノ景  
 況アレバナリ、且ツ或ハ現世ヲ卑ンテ假リノ世ナリトシ、  
 少シモ現世ノ改良進歩ヲ省ミザルカ如キ、既ニ六要中ノ  
 第二及ヒ第三條ニ悖戾スルアリ、或ハ神ノ爲メニハ社會  
 ノ安寧如何ヲ省ミス、狂走血戰シテ第四及ヒ第五條ヲ不  
 問ニ置ク等實ニ許スベカラザルノ行跡少ナカラザルカ  
 如キ怪事多ケレバナリ、故ニ哲學ト宗教ト千歲ノ後ニハ



或ハ互ニ一途ニ出ルヤ否ヤハ暫ク問ハズシテ、今日ノ有  
様ニテ、宗教ヲ以テ直ニ倫理ノ大本トナスハ、哲學上爲シ難  
キ、既ニ上ニ論ゼシカ如シ、

今ヨリ余ハ古來宇内諸國ノ大家先哲ノ說ヲ一々茲ニ惹キ  
出スノコトハ之ヲ止メ、唯、如何ナル說ガ最モ以上ノ七條ニ  
全ク若クハ最モ多ク合格セルヤヲ論定シテ、以テ博ク江  
湖諸君子ノ高説ヲ喚起セン、

余ガ今日迄ノ經驗ニテハ、古來先哲ノ云フ所ヲ閱シタル  
ニ内ニ就キテ、最モ右七條ヲ多ク(全クトハ云ヒ難シ、其理  
ハ結尾ニ到リテ陳述セン)具備スルノ倫理大本ハ、彼ノベ  
ンサム氏ノ幸福主義ナラント思フナリ、今其歸スル所ヲ

略言スレバ、最良最大ノ幸福ヲ最長時間ニ最良最多ノ人  
類ニ賦與スベシト云フノ外ナラズト信ズ、(余ノ了解スル  
所ハ、如此ナリト雖モ、若シ誤謬アラニハベンサム氏ノ  
幸福主義トハ、亦一派異ナル者ト思ヒ給ヒテ)此ノ主義ヲ

詳論スルハ、蓋シ既ニ無用ニ屬スト信ズルガ故ニ、茲ニハ  
唯、以上六ヶ條ニ他ノ說ヨリ合格ノ度ノ高キヲ論ゼント  
ス、第一、最長時間ト云フガ故ニ第一條ノ永久ノ性アリ、第

二、社會ノ改良進歩トハ何ツヤ、即チ最良ノ幸福ヲ最モ多  
ク得ルノ手段増加スルチ云フナリ、故ニ第二條ヲ含メリ  
第三幸福ハ國ノ東西時ノ古今ヲ問ハズ、人類ノ欲望スル

所ナリ、故ニ現在過去ニ反對ノ傾ナク、第三條ニハ全ク合  
格セリ、第四、火急慘酷ヲ主トシ、安寧秩序ヲ省ミズ、且ツ品  
格不相應ニシテ比例平等ヲ尙ハザルヤ皆最良最多ノ人類  
ニ最良最大ノ幸福ヲ與ヘザルヨリ起源スルナリ、故ニ既

ニ最良最多ノ人類ニ最良最大ノ幸福ヲ與フルヲ以テ目的  
トナス以上ハ、第四五及ヒ六條ヲ脱セザルヤ明々白々ナ  
リ  
然ル以上ハ、彼ノ幸福主義、コソ最モ真正ノ倫理ノ大本トナ  
ルベキ性質所要ニ富ムモノト云フベケレ、然レモ惜ムベ

キハ、人心ニハ各僻スル所アリテ、此ノ主義ヲ間然シ得ザ  
ルモ尙ホ之ヲ遵奉スルヲ潔トセザルモノアリ、或ハ之ヲ  
正直ニ解スル能ハザルナリ、實ニ千差萬別ニシテ、頗ル混

難チ極メダリ、難者中ニテ最モ多數ヲ占ムル者ハ、幸福ヲ  
以テ一時肉體ノ快樂ヲ貪ルモノト誤認セルニツアル、此  
レ徒ニ幸福ノ名ノミヲ以テ實ヲ汚スモノナリ、幸福ハ身



体精神共ニ永久高尚ノ樂ヲ得ルノ有様ナリ、然ルニ唯、樂ト云フハ一時ハ急ニ他人ニ影響スルノ如何ト向來ノ差響トニ關セズ己レ一人目下ノ情慾ヲ晴ラスノ有様ヲ云フナリ、以上兩者相隔絶スルコトハ、豈ニ天壤ノ差ノミナランヤ、甲ハ倫理ノ大本トナスベキモ、乙ハ現在ノ社會ヲ破滅セシムル所ノモノナリ、豈之ヲ混同ノ可ナランヤ、世ノ幸福主義ヲ非難スル君子ハ、乞フ此ノ一事ヲ心膽ニ刻シテ、平心虚氣、深クベンサム、ヒユーム、ミル、チースチン氏等此ノ主義ヲ奉スル先哲ノ書ヲ熟讀シ給ハ、必ス大キニ先非ヲ悔ルコトアルベキノミ、

亦茲ニ難者アリテ、曰ク、樂ハ人性ノ好ム所ナリ、然ラバ幸福トナスニハ限ラザルベシ、何者兩元則中ノ第一ニ云ハズヤ、大本ハ人類ノ天然賦與ノ情性ニ從ハザルベカラズト、余對テ曰ク、難者ハ一ヲ知テ未ダニヲ知ラザル皮膚ノ見ニ迷ハサレタリト、幸福モ樂モ相類似セリト雖也、幸福ヲ好ムモ未ダ一時ノ樂ヲ嗜チ余ハ信ゼザルナリ、若シ信ナラバ社會ハ一日モ存在スルヲ得ザルノ理ハ、既ニ樂ヲ解スルノ條内ニテ論シタルカ如シ、若シ一步ヲ讓リテ之

アリトスルモ、尙ホ胃病者ハ大食スルモノナルガ故ニ皆々大食スベシト云フハ、病者ノ行ヲ以テ正トシ、例外ノ事實ヲ探テ眞法トナスニ齊シク、一時身体精神ノ平寧ヲ失シタル一個人、或ハ社會カ一時ノ樂ヲ好メバトテ之ヲ普通ノ正道トナスノ理アラフヤ、以上ニテ己ニ難者ノ横鎗ヲ挫折シタリト信スレバ、今ヨリ進ミテ余ノ未ダ全ク此ノ主義ヲ完全トナスヲ得ザルノ點ニ移リテ以テ結局ニ達セントス、

此ノ主義ノ缺點ヲ總括スレバ左ノ如シ、

第一、此ノ主義ニシテ少シモ間然スル所ナクンヤ、時

ト所ト勢トニ關セズ、普ク遵守セラレベキノ、未

ダ然ラザルハ取モ直サズ、未ダ完全ノ眞理ト爲

シ難キニ因ラン、(七要ノ第七條ニ合格セズ)

第二、此ノ主義ヲ今日一般ニ實行スルハ、頗ル危険

ノ傾向多ク、稍モスレバ一個人ハ勿論國家或ハ

社會ヲ破滅スルノ患極メテ多シ、

第三、此ノ主義ノ眼目タル幸福トハ、何ニ様ノ物ナリ

ヤ、今日ニテハ未ダ漠然空手少モ判然明白ナラ



ザルナリ、

第四、此ノ主義ト雖モ、今日ニ之ヲ活用シ、強テ人カヲ

以テ彼ノ完全ノ眞理界ニ達スルノ具トナスハ

或ハ徒勞トナルノミナラズ、惡シクナサバ、意外

ノ害毒ヲ流布スルモ知ルベカラズ、嗚呼完全ノ

眞理界ナルモノハ、一時火急ニ飛ンデ達スルコ

トハ難キナリ、彼ノ佳境ハ今ヨリ幾千ノ星霜ヲモ

經歷シテ時機ノ熟スルニ非ラズンバ入ルベカラ

ズ、強テ人カニヨリ飛行セントスルモ、時機ノ熟

セザルヲ奈何セン、是レ哲學ヲ妄用シ、之ヲ辱ム

ル所ノ輩ノ深ク誠ムベキ所ナリ、

以上四箇ノ非難モ、或ハ此ノ主義ノ不完全ナルニ因ラズ

シテ、反リテ社會ノ發達ノ足ラザルカ爲ナルヤモ未ダ知

ルベカラズト雖モ、現世ヲ重ズルコトハ大切ナルガ故ニ、現

世ヨリシテ言ヘバ、幸福主義ト雖モ、未ダ完全ノ眞理トハ

爲シ難キコト又明白ナラズヤ、

然ル上ハ、今ヨリ哲學ヲ修ムル君子ハ、銳意黽勉以テ完全

ノ倫理大本ヲ發見シ、人類ヲシテ遠ク禽獸ト隔絶セシメ

社會ヲ完全ノ眞理界ニ達スルノ途ニ出デシメ、今日地球  
上ニ囂々タル迷疑爭亂血戰ヲシテ皆其跡ヲ絶タシメバ、  
豈ニ亦一大快事ナラズヤ、

井上巽軒曰、方今我邦ニアリテ哲學ニ通ズル者極メ  
テ少キヲ以テ倫理ノ大本杯ヲ論ズルモ、知ラント欲  
スル者少ク、又解シ得ル者少ク、唯誤解スル者ノミ多  
シ、故ニ此等ノ事ハ容易ニ論ゼザルヲ可トス、

雜報

○東京生物學會記事 明治十六年一月廿一日(第三土曜)  
午後第二時より東京大學三學部に於て例會を開く名譽會  
員一名通常會員二十五名出席、幹事前會の記事を朗讀し  
畢つて箕作佳吉君の鳥類轉移(Migration of Birds)の説を  
演せられたり次は動物學上譯字を決定することを議し第  
五時閉會と  
同年二月十七日(第三土曜)午後例刻より例所にお於て例會  
を開く通常會員拾名出席、幹事前會の記事を朗讀し畢つ  
て箕作佳吉君のAcineta(微水虫の一屬)の構造及び成育を



松原新之助君の蝸牛交尾の説を石川千代松君の Hydra の  
實驗説及び水母くらげの耳の構造を演舌せられたり次は通常會  
員一名の入會を許し第五時閉會

同十六年三月十七日(第二土曜)午後第二時より東京大學  
三學部は於て例會を開く通常會員十七名出席、幹事前會  
の記事を朗讀し畢つて波江元吉君の貉の説を岩川友太郎  
君の蝶蠟發生論と演せられ第五時閉會

○東京化學會記事 明治十六年二月十七日午後二時例場  
小開會と、會長の撰擧を依り准員規則起草案委員を中澤  
岩太、高松豊吉、久原躬弦、櫻井錠二、松井直吉の五君と  
と、次は中澤岩太君故理學士橋樑三郎氏の卒業論文 本邦  
製鹽の説を邦語と譯し之を印行せんとを發議と衆員異  
議あるを以て之を印行せざるを決し、次は久原躬弦君之を  
印行せざるを通常の如く本會雜誌に登載せんとを發議と  
衆議之を決す次は會長の之を反譯印行せざるを當りての多  
少の入費を要するものかれの之を衆議し付を討議百出遂  
に松井直吉君の金拾圓以内にて該論文を反譯し委員三名  
を撰擧して之を委任せんとを議と衆議之を決し依りて會

長の中澤岩太君を其委員に撰ふ同君の之を辭す故に石藤  
豊太、高松豊吉、植田豊樞の三君を其委員とると、次は櫻  
井錠二君毎會前會の記事を朗讀し會長其當否を會員に質  
問し后ら之の記事録を掲載せんとを發起す衆員之を可と  
し、次は高松豊吉君本會所有の書籍も日を逐ひ増加する  
を以て金五圓以内にて新し書籍箱を製せんとを發議と衆  
議之を決し、次は石藤豊太君有田製陶器略記を演じ、次は  
久原躬弦君 Remarks on the Protection theory of the Oxida-  
tion of aromatic compounds の説を邦語を以て演じ次は櫻  
井錠二君鹽酸アンモニアの構造を演説し次は久原躬弦  
君人造クニインの説を演じ

○得業士 東京大學にての從來卒業生への學士の位を授  
られしか今般更に左之通り改正せられたり  
從前本學卒業ノ學生へハ各學士ノ學位ヲ授與候處今般  
更ニ得業士ノ學位ヲ置キ各學科卒業ノ者へハ直ニ右得  
業士學位ヲ授ケ學位ハ更ニ高等ノ試問ヲ施シ候末授與  
スヘキ事ニ改正候ニ付テハ法理文學部一年生及醫學部  
第五等生卒業ノ部ヨリ實施候條此旨相達候事